

『日本人のしつけは衰退したか : 「教育する家族」
のゆくえ』 広田照幸 著

井上, 豊久
福岡教育大学

<https://doi.org/10.15017/9026>

出版情報 : 生活体験学習研究. 2, pp.99-101, 2002-07-31. The Japanese Society of Life Needs
Experience Learning

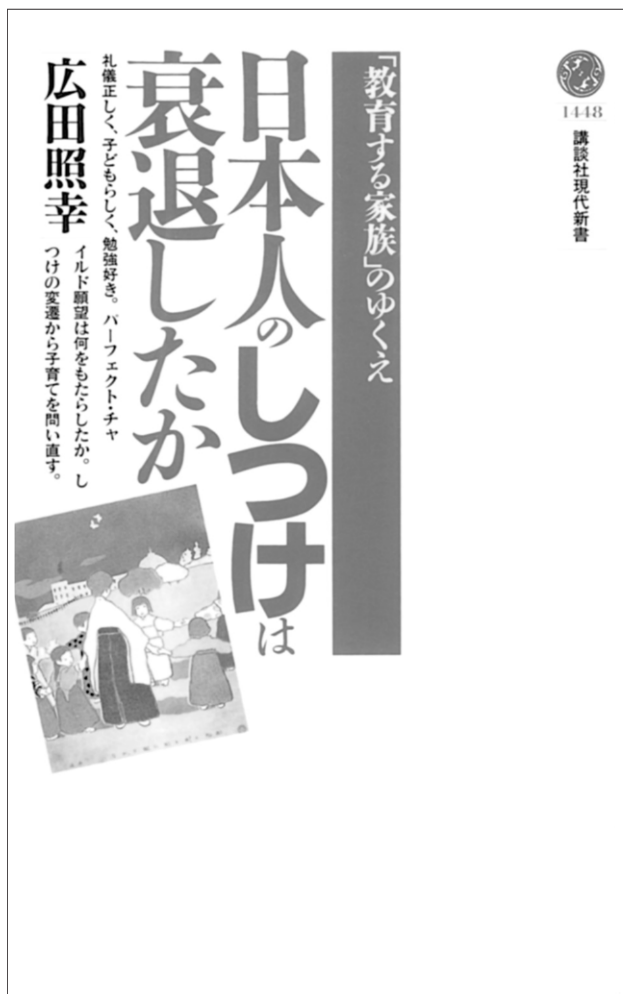
バージョン :

権利関係 :



『日本人のしつけは衰退したか ——「教育する家族」のゆくえ』

広田照幸 著



本書は、教育社会学専攻の著者による「家庭のしつけの昔と今」の吟味と自己規定されている(序章)。また副題に記されているように「教育する家族」のゆくえとして、現代の教育・家庭問題全般がどのようにして形成されてきたのかを描くものともされている。

本書は新書版、専門家のみでなく一般的書物ともなっており、2001年10月に開催された九州ブロックPTA 研究大会においても何人かの運営者や参加者が手元に携えていた。

家庭教育やしつけが単に個人的なものとしてではなく、公的に支援・促進していくという視点から、現在、社会的な関心を集めている。しかし、そのことに関し

て示されている言動や文章は著者も述べるとおり、いたずらに問題性を誇張したり不安をあおるものが存在しており、研究者として「しつけ」の変容と教育力をめぐるイメージを科学的に実証することによって省察を促した書物であるといえよう。

本書で問い直す命題群は以下の3つのイメージからなるとされている。1. 家庭の教育力は低下している(A. 昔は家庭のしつけがきびしかった。B. 最近やしつけに無関心な親が増加している。C. 家庭は外部の教育機関、特に学校にしつけを依存するようになってきている。)、2. 家庭の教育力の低下が、青少年の凶悪犯罪の増加を生みだしている(A. 近年、青少年の凶悪犯罪が増えている。B. それは、家庭の教育力の低下が大きな原因の一つになっている。)、3. 家庭の教育力を高めることが、現在求められている方向である。現代的、一般実践的なものである。こうしたイメージを「しつけの変容という主題を幹の部分に据えつつ、枝葉の展開として、さまざまな教育問題や現代的な家族問題が登場してきた経緯とその性格を描いてみたい(序章)」と述べ、以下のような序章と6章から構成されている(末尾の数字は、ページ・ノンブルと実ページの分量を示す)。

序章 家庭のしつけは衰退してきているのか?
7-22(16)

1章 村の世界、学校の世界 23-48(26)

2章 「教育する家族」の登場 49-74(26)

3章 変容する家族としつけ——高度成長期の大変動 75-114(40)

4章 変わる学校像・家庭像——1970年代——現代 115-148(34)

5章 調査から読むしつけの変容 149-172(24)

6章 しつけはどこへ 173-200(18)

一見して明らかなようにしつけの経過を追っている。しつけそのものを深く追求しているのではなく、村や学校そして家族といった側面からしつけを検証している。

評者はここでは生活体験を含んだ家庭教育における示唆を示している点に注目し、本書の学問的な問題性の抽出も併せて行う。というのも、評者が同年代のものとして同感できる部分が多々ある一方で、著者は家庭の「教育力」という言葉は死語にした方がいい(序

章)と述べ、家庭の教育力の構造そのもの、あるいはしつけの内実の深い分析を本書では扱っていないからである。各章は著書がのべているように枝葉の展開の部分があり、ここでは本題である3つの命題に沿って検討する。

命題の第一は家庭の教育力の低下についてである。明治後半からの資料等を活用し、昔は家庭には教育力はなく、あったとしても労働のしつけであり、地域の教育力とも捉えられる「村のしつけ」があっただけと示す。その労働のしつけは「今のしつけとはまったく意味の違うものであった」(32ページ)と断言する。無意図的教育をも含んだ子どもの総合的な人間形成を考える場合、労働のしつけあるいは労働体験というものを関連づけていくことは必要である。また最近やしつけに無関心な親が増加しているというのも歴史的にみれば昔は関心を親が子どもに関心を持つようにも持てなかったという。確かに過去はよりよく思い起こされがちであり、過去にしつけはなく、あったとされる村のしつけも「自らの従属的な地位を自覚し、その『分際』を超えないふるまい方を身につけさせられることでもあった」(34ページ)という論述は、人権教育研究等の先行研究では既に指摘されていることとはいえ、家庭のしつけに対する過去への羨望だけでなく、現在、一部の地域で早急に半ば強引に復活させようとしていられる地域に対する重要な示唆である。しかし、子供組・若者組という言葉が使われ村のルールの閉鎖性への指摘は適切な部分もあるが地域の教育力の中に存在した普遍性についての分析が弱い。地域の教育力においても公民館活動などについてはまったく触れていない。紙幅の制約があるとはいえ「民主性」を論じている以上、この部分の先行研究に若干は触れて欲しかった。歴史的ということであえて戦前・戦後等という視点が注視されているが、全体として昔という時代設定が「低下」を論じようとする読者が求める時代設定と若干ずれている感がある。著者も提示している個人主義化の進行の中、福岡県教育委員会が1980年から5年ごとに実施している約5000人の親への調査結果からはしつけへの無関心層は拡大しており、そこへの切り込みが求められる。学校にしつけを依存するようになっていくというのも昔は学校と家や村は別の論理であり、家庭の教育力のなかった農村や貧困層がしつけ

を放棄していたと述べている。階層的な指摘がタブーになつてきているという著者の指摘は現在でも通用する部分が多く、虐待等の問題への重要な内容を含んでいるのではなかろうか。

第二の家庭の教育力の低下が、青少年の凶悪犯罪の増加を生みだしているという命題には、青少年の凶悪犯罪は増加していない上、世界の中でも少ないということを図示し(179ページ)明示している。マスコミ等の問題性の誇張への既存の資料提示であり、不安を軽減する一つの材料となっている。少子化傾向の状況化での横這い状況の意味、著者と同様評者も現在の心理学特にカウンセリングの盛況に危惧を覚えるとはいえ実態としての少年犯罪者の無気力的傾向を過去の家庭における体験の量的・質的視点から指摘していくことは必要であろう。我が国の少年凶悪犯罪者の家族に対する責任の矮小化に対する問題の指摘は肯ける。しかし著者のいうとおり変化の中では示しがたいとはいえ、家庭の教育力の差異による犯罪発生状況の違い、あるいは犯罪発生萌芽状況の違いは児童相談所等の臨床ケース事例等からも示される所であり、例えば虐待する親の子供からの分離だけでなく、親への学習支援を含めた教育力を今後の家庭の教育力向上ではどうしていくかの検討材料の提示が求められよう。

第三の家庭の教育力を高めることが、現在求められている方向であるという命題に対しては、子供らしさを尊重する児童中心主義(童心主義)、子供らしさを否定し人格を重視する厳格主義、知識中心で子供らしさを否定する学歴主義の3つの相反する目標と、それを達成しようと「完璧な子供=パーフェクト・チャイルド」への実践が進んでおり、全体的な実態として「十分な時間と金と配慮をわが子に投入することが可能になった(あとがき)」のが現在であるという。確かに忙しさや貧しさ、あるいは家父長制度の中で縛られなくなったという指摘は的を得ている部分もあるが、著者が中心的に論じる学校との関係でいえば、不登校あるいは不登校意識の増加は子供に対する親への責任集中だけでは片づけられない。また確かにマスコミ等で騒ぎ立てるほどではないにしろ前述の福岡県の調査においても社会性発達への家庭の教育力・影響力は減少しているのである。ここで問うべきは家庭の差異に注目すると同時にやはり最低限の共通の事項として家庭の

教育にはどういった構造化された切り込みが必要かが提示される必要がある。このことはしつけへの不満が社会全体のモラル低下よりも「世代差、階層差、個人差に由来しているしつけに対する考え方や態度の多様性から」であるという指摘がされる一方で、家庭だけの責任ではないにしろ実態として他人との関係性の中で自分を捉えられない少年の増加に対してはどうかという疑問が生じる。

以上3つの命題に沿って論評してきた。全体として歴史的な事例やデータを効果的に示し、単純化したわかりやすい図式を活用して命題を検討しており、昔のしつけに対する無批判的な復活に対する意欲的反論となっているということでは評価できる。しかし、確かに意図的無意図的という分類は必要であるが、例えば民主型と著者が示すしつけの構造化や基本的な生活習慣や礼儀作法・公衆道徳などとして示されたしつけの内実に対するさらなる提示と、無意図的とだけでは切り捨てられない消費・メディア文化をも含んだ総合的な子供の人間形成あるいは検討されるべき体験の量・質についての論述が求められる。この著書全体の流れとして主として学校という側面からみているという面は

あるにせよ、数量的に一部示されたとしても「あらゆる階層が学歴主義的階層に巻き込まれ（114ページ）」というのは人生生活全体からすれば一面であり、やはり学校以外の教育力に対する分析・提示が著者のいう「広義（20ページ）」のしつけの変容提示には不可欠であるということを感じさせる。このことは全体として否定的に捉えられている過去の地域の教育力には階層を超えた事象や「お陰様」意識といったものだけでなく、現在も普遍的に生かされているものもあり、社会階層や地域の多様性をどこまで踏まえているのか、という疑問も生じさせる。フランスのフェミニスト哲学者とされるバダンテールの引用（125ページ）ではあるが母親と同様の存在として母親と子に割り込む父親の現出への分析、柴野昌山による「不明確な上下関係、あいまいなアイデンティティ、自己選択にもとづく柔軟な役割遂行によって特徴づけられる不安定な構造（190ページ）」と目黒依子の「家族の個人化」（190-191ページ）をしつけの観点からさらに関連づけた分析があれば興味深い。

〔講談社、1999年、660円税別〕

（福岡教育大学 井上 豊久）